

紀州移民に関する歴史の伝承と地域の活性化

東 悦 子

1 はじめに

我が国には、広島、山口、沖縄等、全国に移民県として知られる地域がいくつかあるが、和歌山県もまた有数の移民輩出県として知られている。カナダへの移民を多く輩出し、アメリカ村の通称で有名な和歌山県日高郡美浜町、ハワイ水産業界に貢献する漁業従事者を多く輩出した串本町、北米、そして豪州への移民を多数輩出した太地町をはじめとする紀南地方の町々があり、そのような地域では、先人達の残した紀州移民の歴史を伝承し、国際交流に取り組んでいるところがある。しかし残念なことに、このような先人の歴史を知る若い世代は、非常に少なくなっている。

さて、歴史伝承のすばらしい事例とその重要性を示す出来事がある。1890（明治23）年9月16日、トルコの巡洋艦「エルトゥールル号」は、熊野灘を航海中、悪天候のため、海の難所として知られていた檜野崎灯台下の岩礁に乗り上げ、沈没した。その際、地元住民が救助活動を行った。この史実がトルコで継承されていたことにより、その後百年になろうかという1985年3月17日、イラン・イラク戦争が始まった際に、トルコ航空の飛行機が、イランに住んでいた日本人216名をテヘラン空港から成田に救出してくれたのだという（串本町役場HP参照）。

2008年5月30日、和歌山大学において、トルコ人初の宇宙飛行士候補であるアニリール・セルカン氏の特別講演会が開催されたが、その講演の中でも、トルコと串本町の歴史に触れ、トルコでは小学生も串本のことを知っていると言われた。串本町（旧大嶋村檜野）とトルコの友好関係は現在も続いている。

ビジット・ジャパン・キャンペーンの概要（『平成20年版 観光白書』p.84）に、「我が国の観光魅力は、外国人の共感を呼び起こす「ソフトパワー」であり、グリーンバリエーションの下、一人一人の交流を通じ相互理解の促進を図ることは、国家間の外交を補完し、安全保障に大きく貢献するものである。また、我が国の少子高齢化に伴う人口減少や周辺諸国の経済発展に対応して、観光交流を促進し、地域活性化に貢献するとともに、外国人観光客の受入れに伴う国内ビジネスを後押ししていく必要がある。」とある。

本県における海外との交流史は、移民として世界各地に渡った人々の歴史を抜きに考えることはできないであろう。この歴史こそ本県の観光の魅力の1つとして、世代を通して継承してゆくべきであり、観光交流を促進するうえで貴重なファクターの一つとなり、地域の活性化を促すことにつながるのではないかと考える。

本稿では、まず和歌山県の特徴の一つである紀州移民について概観する。次にその移民の歴史や生活史を現在に伝承するために重要な役割を果たしている資料館や博物館の事例を取り上げ

る。最後に、地域の活性化に大いに資するであろう観光における紀州移民の歴史伝承の意義や国際観光への導入について検討する。

2 紀州と移民

現在、日系（*Nikkei*）と呼ばれる人々が世界各地で暮らしている。日本から世界各地への移民が始まったのは明治の頃である。1868（明治元）年、さとうきびプランテーション労働者として契約移民153名がハワイに渡ったのが、日本人最初の海外移住であるといわれている。この時、駐日ハワイ領事であったアメリカ人商人ユジーン・ヴァン・リードが、新政府の承認なしに渡航させてしまった経緯から、約17年間の中断期間があったが、1885（明治18）年に、日本・ハワイ間に協約が結ばれ、第一回官約移民がハワイに渡航した。多くの日本人が労働を目的に、ある者は農業従事者として、ある者は漁業に携わるためにと、ハワイ、北米、カナダ、オーストラリア等世界各地へと故郷を後にした。当初、移民先での労働によって蓄えを得れば日本に帰国するという、一定期間の労働が目的の移民であったが、次第に移民先に留まる者も出現し、その人達が日系一世と呼ばれるようになった。世界の地域により世代交代の継承時期は異なるけれども、一世と呼ばれる人達の人口は減少し、初期に移民が始まった北米やハワイ等では、二世の方々も高齢に達し、すでに三世や四世の時代に至っている。

和歌山県は全国的にも有数の移民県として知られているが、和歌山県下のいくつかの地域と移民先には特徴が見られる。なかでも、日高郡美浜町三尾地区からのカナダへの移民や東牟婁郡串本町をはじめとする紀南地方からハワイへの移民、また東牟婁郡太地町および那智勝浦町等からは、北米あるいはオーストラリアへ移民として渡った人が多い。

三浜町三尾地区からのカナダへの移民は、1888（明治21）年、工野儀兵衛が横浜からカナダ（スティヴストン）へ渡ったことに始まる。そこでフレザー河を上る大群の鮭を見て、鮭漁の可能性から村の人を呼び寄せたのである。このことにより鮭漁を目的とした三尾村からの集団的移民が始まった。

三尾地区は西側に太平洋、東側には山が迫っている地形である。耕作地として利用できる面積は非常に限られていた。漁業においては、当時漁場争いもあり、厳しい生活を余儀なくされていた。三尾地区の人々の漁師としての技術と地縁的なつながりから、特に鮭漁を職業として漁業基地スティヴストンへの移民が集中したのである。そして、移民先で成功を収めた人々が、西洋様式の習慣や文化とともに帰郷し、三尾のアメリカ村と呼ばれるようにさえたのである（小山、1984参照）。

和歌山県からハワイへの移民は、1885（明治18）年2月に、第一回官約移民953名がハワイ・ホノルルへと足を踏み入れた時、本県から22名がハワイへ渡っている。続く1885年6月、第二回官約移民983名の中に、33名の和歌山県人が含まれた。この頃は、ハワイ各島の砂糖耕地で働くために三年契約で渡航していた。その後、1900（明治33）年、ハワイがアメリカ合衆国に併合され、

契約労働がアメリカの国法に違反するとして、日本人は自由にハワイに渡航できるようになり、仕事を選択できるようになった。

当時のハワイの漁法は、カヌーによる沿岸漁業程度であったので、漁業に関する経験があり、技術や知識を有する和歌山県の紀南出身者、串本地方の漁師が活躍することとなった。また明治18年に官約移民が開始されて以来、多くの日本人が居住するようになり、魚類の需要が増していった。1924(大正13)年に、ハワイ全島の在留和歌山県出身者は、1124名で、9割までが漁業に従事していたとある。オアフ島では、全漁業家の38%を占めていた。和歌山県人は、主として鯉漁や鯖漁に従事した(『和歌山県移民史』『串本町史』参照)。ハワイの政治情勢の変化、当時のハワイの漁法、串本をはじめとする紀南地方の漁師の技術や知識、そして魚類の需要の高まり、このような要因によって、本県串本町をはじめとする紀南地方からハワイへの移民は多くなり、後にハワイ水産業界に貢献することになった。

和歌山県からアメリカへの移民は、最初は上述のハワイへ渡るものが多かったが、開拓の途上にあって労働力が不足し、移民を歓迎したカリフォルニアへの渡航者がしだいに増えた。太地村からの北米移民については、「明治二十四年頃、藪内音之助、角川謙二、和田新太郎、筋師千代市、和田小文治、和田五郎市、衣笠米蔵、向井音市、山下忠六、山下菊松の諸氏が率先して渡米したのが、わが郷土のアメリカ移民の草分けであり、先駆者である(『太地町史』p.791)」とされている。

太地村から北米への移民の輩出に関しては、『和歌山県移民史(1957)』によると、「太地町は古来から熊野における捕鯨の港として聞こえたところであるが、近代は移民の町としても有名である。また多数の移民者が殆どアメリカ合衆国移民である点も、他地方と趣を異にした一特色をなしている」とあるが、111名が死亡・行方不明となる、1878(明治11)年の大遭難によって古式捕鯨が壊滅し、移民を余儀なくされたという背景がある。移民の目的は村内の貧困を打開することであった。一方、漁夫や村民の生活は楽ではなかったが、捕鯨が盛んな地で、鯨方と呼ばれる重役達が富を持ち豪華な生活を送っていたという。この「当時の社会情勢が財力の如何に有難いものかを痛感」させたという。また太地の人々は「当時の郷土人が海に親しみ、恐れないという自然的な感情」を持っていた。このような点が、太地村の北米移民の海外発展性の要因として挙げられる(『太地町史』pp.773-774参照)。

オーストラリアへの移民に関しては、1882(明治15)年に和歌山県人中山奇流や渡辺俊之助(広島県)が渡航し、木曜島発展における邦人の先駆者となった。1883(明治16)年、英国人ジョン・ミラーに雇われて、外務省の許可を得た最初の正規契約労働者37人が渡豪し、トレス海峡で真珠貝の採取に従事した。1883年、および1886(明治19)年、1888(明治21年)の3回に渡り、合計177人の日本人契約移民がオーストラリアに渡り、明治30年には、全豪在留邦人数は2000人を突破、木曜島で採貝労働に従事する者は900人に達し、その約8割を和歌山県人が占めたという(今野・藤崎:1996参照)。

ブルームの日本人移民については、永田(2002)によると、日本人がいつブルームに来たのかは定かでないが、1891(明治24)年にはブルームを中心とする西オーストラリアに322人の日本人

が住んでいたと記録されている（pp.24 - 25）。1901（明治34）年に移民制限法が導入された年には、3602人の日本人がおり、大半は真珠貝採取かさとうきび栽培に従事していた。彼らの出身地は、和歌山県、広島県、山口県、熊本県などの農漁村出身であったとしている（p.23）。

当時高級ボタンの原材料として白蝶貝の貝殻が用いられたため、勤勉で腕の良いダイバーが必要とされ、真珠貝採取業がオーストラリアへの移民の中心の仕事となった。このような背景のもと、ダイバーとしての力を発揮した、特に和歌山県紀南地方出身者の移住が促進されたのである。

3 移民史を伝える博物館・資料館（海外事例）

3.1. ブルーム歴史博物館（Broom Historical Society Museum）

2007年3月5日、西オーストラリア・ブルーム博物館を訪問する（写真1.）。ブルームはかつて高級ボタンの材料としての真珠貝採取地として有名で、多くの日本人が真珠ダイバーとして渡っている。同博物館には、ブルームの歴史を伝える品々が展示されているが、それは真珠貝採取の歴史でもある。真珠ダイバーに纏わる品々や、その後の真珠貝養殖最盛期の日本人移民の様子、第二次世界大戦時の日本軍による攻撃を示す展示物もある。展示室では、重々しいダイバースーツが、まるでダイバーが身につけて立っているかのように吊り下げられており、興味を惹かれる。ブルーム歴史博物館の規模は小さいが、貴重な歴史的物品や資料が保存されている。

訪問した日は、偶然にも和歌山県東牟婁郡下里町出身のダイバーであった浜口博司氏（2007年夏逝去）の奥様が勤務中で、入り口のカウンターで、博物館を訪れた人と気さくに話をして対応にあたっていた。また現地の方も気軽に訪れている様子が伺えた。

近くには、日本人墓地があり、707基919人の墓碑がある（写真2.）。和歌山県出身者の名が刻まれた墓石も多く見られた。残念なことに子どものいたずらがあるそうで、真二つに割れた墓石が、修復のために博物館の庭に持ち込まれていた。

その他、真珠採取船が保存されているパールラガーや、元は日本人の雑貨店として建てられた半野外映画館サンピクチャー、真珠ダイバーの像等、ブルームの街全体が現在も往時の足跡を随所に残している。ブルーム歴史博物館を中心として、街全体に真珠ダイバーの歴史が保存されて



1. ブルーム博物館



2. 日本人墓地

いる。ブルームの人々にとっては、真珠ダイバーの歴史は現在も身近な事柄であり、その歴史が大切に守られている印象を受けた。

3.2. ハワイ日本文化センター (Japanese Cultural Center of Hawaii)

2008年9月24日(現地日時), ハワイ日本文化センター(2452 South Beretania Street, Honolulu, Hawaii)を訪れる。同センターは立派なビルの1階にあり、展示室と本や日本の品物(着物や器等)を販売する購買コーナーに分かれている(展示室撮影禁止)。訪問当日、センターではリタイアした年齢の方から若いスタッフまで数人の方がいて、アットホームな雰囲気業務にあたっていた。全員日本人だと若いスタッフが教えてくれた。日系二世の方に案内してもらい話を聞くことができた。英語でも日本語でも対応してくれる。

展示室はそれぞれのテーマを掲げて11コーナーに分割されている。順路に従って、「心に銘を刻んで」「日本からハワイへ」「プランテーションにて」「家庭」「ストライキとマスコミ」「授業」「コミュニティ」「シアター(第二次世界大戦時の記録映画の上映)」「戦後のハワイ」「おかげさまで」「マルチ文化のハワイ」である。建物のフロアーにも工夫が凝らされ、「日本からハワイへ」のコーナーのフロアーは船のデッキを模しており、「プランテーション」のコーナーでは、さとうきび耕地の赤い大地が表現されていた。またシアターでの記録映画を通じて、戦時下において収容所へ送られた日系一世の状況やハワイで生まれ育った日系二世のアイデンティティの苦悩が伝えられている。

非常に印象深いのは、最初のコーナー「心に名を刻んで」である。センターに掲げられた常設展示のテーマは「おかげさまで I am what I am because of you」であるが、移民としてハワイに渡った人々の価値観が、日英両言語で、12本の碑に次のように記されていた。「犠牲」「義理」「名誉」「恥・誇り」「責任」「感謝」「仕方がない」「頑張り」「我慢」「恩」「孝行」。展示は歴史的に時代を追うように配置されているが、移民史の概説や生活状況の展示だけに終わるのではなく、上述の碑に象徴されるように、移民者の心意気やそれを支えた当時の日本人の信念が強く打ち出されているところに特徴が見られた。



3. 日本文化センター



4. 日本文化センター近く、広島からホノルルへ贈られた厳島神社鳥居のレプリカ

3.3. ハワイプランテーションビレッジ (Hawaii Plantation village)

2008年9月22日(現地日時), ハワイプランテーションビレッジ(94-695 Waipahu St., Waipahu, Honolulu)を訪問する。ビレッジの敷地内にトンネルがある。それはタイムトンネルの役割をしており,そこを抜けると,ハワイのさとうきびプランテーションで労働に従事した日本人をはじめ,中国,ポルトガル等,様々な国や地域の人々の住まいが再現されている。住まいの内部に入ると展示物によって当時の生活の様子を実感することができる。加えて,商店,フロ(公共浴場),診療所や床屋等も再現されている。このような施設の中にある釜を利用して料理が作られたり,集会所で集まりも開催されているそうで,コミュニティによる施設の活用を通して,移民した人達が持ち込んだ各国の文化や習慣が受け継がれている。

また広々とした敷地内には,さとうきびプランテーションで運搬に利用された機関車も展示されていた。様々な果樹が植えられ,タロイモも栽培されている。湿地には無数のめだかが泳いでいた。これは当時,蚊に悩まされた日本人が持ちこんだもので,ぼうふら対策であった。事務所のある建物では,まずプランテーション労働者に関するビデオを視聴し,その後,展示室の閲覧ができる。労働時の服装や道具等が展示されており,プランテーションで労働に就いた人々の状況が把握できる。

当日は,屋内,屋外の施設共に,ハワイに永住の日本人の方が案内してくれた。本施設は,建物内だけの展示ではなく,プランテーションの生活そのものを住居で再現しているところに特徴があり,その施設の一部がコミュニティによって利用されている点において,プランテーションで労働に従事した人達の生活文化や習慣が継承されていることが推察された。



5. 広い敷地の一角に当時の移民者の家が国毎に再現されている。写真は日本の家の中



6. 展示室で,日本人移民の作業姿

4 移民史を伝える博物館・資料館(国内事例)

4.1. 山口県・日本ハワイ移民資料館

2008年9月13日,日本ハワイ移民資料館(山口県大島郡諏訪大島町)を訪問する。16歳でサンフランシスコに渡り,後に貿易事業で成功を収めた福本長右衛門が帰国後建てた本邸を遺族の方が

寄贈したものである。田園風景の広がる町の少し高台にあり、日の丸とハワイの州旗がはためいていた。民家をそのままに利用しており、部屋毎に写真や当時の生活道具等が展示されている。移民者の様子等を紹介したビデオも視聴できる（館内撮影禁止）。また移民としての労働から得たお金で小学校に寄付されたというピアノも展示されている。かつての所有者が使用していた品々もある。当日、資料館には女性スタッフが1名いて、気さくに見学者と話したり、質問に答えたりしていた。移民として成功を収めた人の住居を利用している点に特徴があり、所有者がどれ程の成功を収めたのかが偲ばれる建築であった。



7. 日本ハワイ移民資料館



8. 資料館周辺、大島町の田園風景

4.2. 和歌山県・カナダ移民資料館

2008年6月2日、アメリカ村・カナダ移民資料館（和歌山県日高郡美浜町）を訪問する。美浜町三尾地区は、明治期よりカナダや北米への移民を多数輩出していることで有名である。風光明媚な山の上に建物があり、眼下には美しい海が広がっている。資料館では、カナダへ移民として渡った人たちが鮭漁に従事した際に使用した道具や缶詰工業で働く様子のパネル、三尾村への帰国後も西洋様式を取り入れた生活をし、その中で使用していた日用品等が展示されている。またカナダでの移民者の生活の様子等をコンパクトにまとめたビデオの視聴ができる。

三尾地区には、今も帰国した移民者の生活を髣髴とさせる洋風式家屋や「アメリカ」という表記が使用されている看板が残っている。当時帰国した人達は、英語混じりのことばを用い、西洋風の服装を身につけ、座卓ではなくテーブルで食事をしたりしたという。このような西洋風文化が、移民としてカナダに住んだ人々に持ち帰られ、大正期から「アメリカ村」と呼ばれるようになったのである。写真9.は、現在も実際にあるバス停留所「アメリカ村」である。

当地では、カナダ移民資料館館長であり、語り部として当地区の移民史を伝えている西浜久計氏に案内いただいた。当地から移民としてカナダに渡った人々の状況が、単に古い過去のことではなく、現在の礎となっている現実のものとして捉えることができた。現在、西浜氏は後継者がいない事を憂えておられる。また本資料館は公的施設ではないので、資料館の維持や存続において課題が生じる可能性も推察された。



9. バス停「アメリカ村」



10. カナダ資料館となっているが、館長によると厳密にはカナダ移民資料館である

4.3. 和歌山県東牟婁郡太地町の取り組み

2008年6月12-13日、太地町を訪問する。12日は、太地町公民館にて生涯学習講演会が開催され、筆者は「移民者の活躍」をテーマに、1892（明治25）年、東牟婁郡太地村（現太地町）出身の筋師千代市編述『英語獨案内 附西洋料理法』の内容を中心に講演を行なった。氏は米国カリフォルニアに渡り、移民者として苦労した自らの体験をもとに、後進の移民者の為に本書を著した。

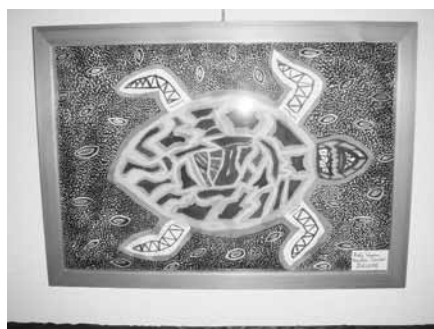
（東・江利川2004，東2005）

太地町公民館では公民館報『鯨波』を発行し、その時々地域の身近な話題に加えて、移民として海外に渡った方々に関する記事等、当地の歴史や文化に関しても積極的に取り上げている。それにより、地域の人々にその地の歴史や文化が伝承され、地域を出て暮らした人々との時間や空間を越えての繋がりが保たれている。筆者が講演したことも、その一例である。

翌13日は、太地町公民館および太地小学校を訪問し、写真や資料を閲覧する。小学校で閲覧した資料の中には「寄贈商品授与名簿」があり、移民として北米に渡った人々が、故郷の太地尋常高等小学校に賞品を寄贈し「米国加州サンビードロ賞」として、児童に賞品が授与された記録が



11. 米国加州サンビードロ太地人会より太地尋常高等小学校児童への寄贈商品の授与名簿（太地小学校蔵）



12. 太地町公民館に展示されている姉妹都市ブルームの児童達の絵の1つ

残されている。どの地域においても、移民した人々が家族への送金だけでなく、故郷の為に寄付をしている例が多々見られる。移民者の故郷への想いが推し量られる。

太地町では、これまで移民展を開催するなど積極的に当地の移民史を伝承している。学校教育においても、当地の人々が真珠ダイバーとして活躍したオーストラリア・ブルームにある学校との交流を実施している。移民として海外に渡った先人の歴史を現在に伝え、その交流史を若い世代での国際交流へとつないでいる。当地においては、公民館が移民資料館の機能を果たしているのが見受けられた。また地域全体が協力し、移民史を伝えてゆこうという努力がなされている。

5 移民史の伝承と地域の活性化

3.4.において、移民をテーマとした施設や博物館の事例について主観的観点から報告した。各施設では、展示方法における共通点とそれぞれの施設ならではの特徴的な点が見られた。これらの点は以下のようにまとめられる。移民史に関する歴史伝承において重要な役割を果たすべき施設として、また多くの人々が興味を持って集まる魅力ある施設として、博物館や資料館の機能を一層充実させるための観点を示唆するものであろう。

< 展示における共通点 >

- ・ 移民先で使用された衣服、生活用品、仕事のための道具類の展示
- ・ 移民先の生活、労働の様子等の写真
- ・ ビデオ視聴：特定地域における移民史の導入ビデオ、あるいは移民史における特別なテーマに絞った内容（例：第二次世界大戦時の記録映画）のビデオ

< 各施設に見られた特徴的な点 >

- ・ 日系のスタッフによる日・英両言語によるガイドや語り部による伝承（ハワイ日本文化センター、ハワイプランテーションビレッジ、カナダ移民資料館）
- ・ 移民者の心意気や当時の日本人の信念に触れている（ハワイ日本文化センター）
- ・ 当時の家屋を再現した体験的施設（ハワイプランテーションビレッジ）
- ・ 見学者だけの施設ではなく、コミュニティによる活用を通して、生活文化や習慣を伝承している（ハワイプランテーションビレッジ）
- ・ 街全体に点在する施設を回ることにより、当地における移民の足跡に触れることができる（ブルーム）
- ・ 施設の立地が、海や山等が近くに迫る自然の美しい場所である。（日本ハワイ移民資料館、カナダ移民資料館、太地町公民館）
- ・ 移民者が持ち帰った文化の一端（建造物や標識等）が、現在の生活に残っている（諏訪大島町、三尾地区、太地町）

移民に関する歴史の伝承は、今その地域に住んでいる人々への伝承および国内、海外の両方を

含む地域外の人々への伝承が含まれる。伝承の方法としては、上述の共通点にみられる実物の展示、写真、ビデオという方法が効果的で必須のものであろう。さらに、語り部のような人材が求められるが、地域において移民史が伝えられていれば、道行く人々が皆、語り部となれるのである。次に海外発信となれば、いかに発信するか、発信の手段は何かという点が課題になる。英語をはじめとする多言語のホームページ、ガイドブック、パンフレット等の作成が最も一般的であろう。

それにもまして重要なことは、何を発信するかという中身である。具体的には、移民史が時系列に語られるだけではなく、特定地域のどのような背景が移民を促進したのか、その地の人々の状況とともに心情、信念といった精神にまで深く触れることのできる伝え方が必要であろう。歴史的事実としての移民史伝承の重要性に加え、その歴史を作り上げた一人一人の、移民先での計り知れない苦労や故郷への想い、海外においてこそ、改めて認識される日本人としての精神性等、容易に文字に記すことのできない部分を理解し、伝えてゆく必要がある。

観光を考えると、和歌山の恵まれた自然は大きな魅力である。和歌山県のカナダ移民資料館、太地町公民館ともに、その地に足を踏み入れれば旅行者は自然の美しさを体感するだろうが、美しい自然が、実はその地に住む人々が移民を余儀なくされた要因でもあり、促進した要因でもあった。海、山が迫っている地理的条件は、農業を営むには十分な耕地面積を提供してくれない。貧困からの脱却のための移民であった。海が近く漁業に従事していた人々は、その技術が移民先での仕事につながった。

また日本人の特性とされる勤勉さも、移民先で日本人労働者の需要が高まった要因の一つであり、日本人排斥運動の一因ともなったのである。過酷な労働や言葉の通じない地において苦労を重ねた移民者を支えたものは何か。ハワイ日本文化センターに見られるような日本人の価値観を考察することも重要であろう。すなわち、3世、4世、5世と呼ばれる日系の世代が、自身のルーツを求めて訪れてみたいと願うような地域の歴史的財産として、紀州移民の歴史が伝承されることは意義深い。

本県における紀州移民の歴史は、まさに我が地域固有の歴史と文化である。多くの移民を輩出した本県の各地域が、その歴史を踏まえて、1) 独自性のある資料館展示を展開し、そこを拠点とした地域への情報発信および普及を続けることが必要であろう。加えて、2) 海外における先人達の移民先との地域レベルでの国際交流を継続し人的交流を深めてゆくことが、移民史を継承することにつながるとともに、新たな交流史を紡ぐことになる。さらに、3) 点在する移民史上ユニークな地域の魅力を、本県が有する観光の魅力として包括的に捉え、広く海外へもその魅力を発信し国際観光を促進する取り組みへと発展させられるならば、本県および移民を輩出した各地域の活性化へと繋がると期待される。

引用および参考文献

東悦子・江利川春雄(2004)「紀州太地村で刊行された移民用の英語教材 筋師千代市『英語獨案内』の

文化史的価値」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第24号

東悦子(2005)「移民用英語教材 - 筋師千代市『英語獨案内』 - 再考」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第26号

(2006)「紀州移民についての一考察 - ハワイと和歌山県人」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第27号

(2007)「移民史に残る紀州の真珠貝ダイバー - 西オーストラリア ブルームを訪ねて」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第28号

今野敏彦・藤崎康夫(編著)(1996)『移民史 アジア・オセアニア編』新泉社

国土交通省(2008)『観光白書』株式会社コミュニカ

小山茂春(1984)『わがルーツ・アメリカ村 老人たちはいま』ミネルヴァ書房

串本町史編纂委員会(1988)『串本町史 資料編』

串本町史編纂委員会(1995)『串本町史 通史編』

永田由利子(2002)『オーストラリア強制収容の記録』高文研

太地町(1979)『太地町史』

和歌山県(1957)『和歌山県移民史』和歌山県

参考ウェブ・サイト

串本町役場ホームページ <http://www.town.kushimoto.wakayama.jp/>

日本ハワイ移民資料館 <http://www.town.oshima.yamaguchi.jp/hawaii/>

太地町公式ホームページ http://www.town.taiji.wakayama.jp/tyousei/sub_ayumi.html

和歌山市民図書館移民資料室 http://www.lib.city.wakayama.wakayama.jp/wkclib_doc/imin-top.htm